

「もう我慢出来ません。」

「おまんこさせて頂けると許可をくださるっ」



ハアハア…♡

ハアハア♡

ハア♡

キューン

ガッ

「押し倒した上に跨っておいてよく言うぜ。」

「まるで盛った牝猫だな」

「はいっご主人様のちんぽに夢中の、下品でスケベな牝猫ですっ。
おまんこ寂しくてどうにかかってしまいそうです」



「これ以上お預けするってのも酷な話だな。
いいぜ存分に味わいな。どうせお前みたいな色欲魔の相手は
俺にしか務まらねえからな」



「ありがとうございますっ！そうですっ！そうです。
ご主人差のじゃないとダメなんです。

これがないと満足出来ません。んっ……ああっ♡」

ズイッ！！



「やっぱりご主人様のおちんぽ、一番気持ちいい所に届いて、
おいらっこおです♡」

パチュン♡

パチュン♡

パチュン♡

パチュン♡

おちんぽ

「お前の身体はそういう風に作り直されてるからな。
俺以外のどんな男だろうともう満足出来ないだろうよ。
過去のドライバークンでもな」



「あんっ……誰の事かわかりませんが、
ご主人様以上の牡なんて存在しませんっ♡
私を満たしてくれるのはご主人様だけですっ」



「戻れないし戻る気もないわけだ。

死ぬまで俺だけの女ってわけだな」

「はいっ♡未来永劫ご主人様だけの牝奴隷です。

御主人様に尽くす事が最大にして唯一の幸せです」



「極上の牝穴もこのだらしなく下品なウシ乳も
すべてご主人様のものです。いつ何時求められても構いません。
存分にお使いください」



「私だけ除け者にしないでください。私も頑張ったんですから」
「悪い悪い。ヒカ리를堕とせたのもお前のおかげだもんな。」
「しっかりごほうびををやらないとな」



「あっ、ご主人様そこっ♡弱いんです♡」
「自分から顔に跨っておいて何言ってやがる。
それにお前に強い所なんてないだろうが」



「はいっ、ご主人様に徹底的に調教されて、

全身弱々のクソ雑魚ブレイドです♡舌、気持ちいい所入ってえ♡」



「ホムラは記憶が残ってたよな？」

「前のドライバーと俺どっちがいい？」



「そんなの、比べるまでもありません。」

私達二人にとって牡とはご主人様のみを指します。

他の生物は全てゴミ同然か、一部の優秀な奴隷候補の牝だけです」

「元恋人相手に酷い言い草だな。」

お前達を目覚めさせてくれて俺は感謝すらしてるぜ。」



「私達をご主人様に引き合わせてくれた事だけは感謝しています。
ですがそれだけです。」

ご主人様に会うまでの全てが私にとっての蛇足でした。
全く持って無駄な時間です」



「ホムラも……んっ……そんな煩わしい記憶、
私みたいに消してえっ……もらえばいいのよ。
私の頭の中にはご主人様しかいないわ。
私達闇の聖杯はご主人様だけを
見ていればっ、いいん……だかぁ♡」



「比べる対象がいた方が素晴らしさが理解できるって
事もあるんですよ。それに、

また何かの役に立つかもしれないから……ね? ご主人様」



「お前達が俺だけのものだという事に心配も疑いもないからな。
俺のための選択なら何文句もねえ」

「はい、私達が取った行動は全てご主人様を思っでの事です。
安心して下さい」



「だから今は存分にご主人様に特注されたドスケベボディーを
ご堪能くださいね。ご主人様の気が済むまで
お付き合いたいします……んはあっ♡」



「言われなくてもそのつもりだ。」

「こんな極上の牝前にしたらぶち犯すしかないからな!」

「あっ♡そこ、激しっ♡ご主人様のちんぽ♡気持ちいい所、
ガンガン、届くっ♡♡」

「最高の腰使いだ。無理やり植え付けた知識だったのに
もう自分のものにしてるって感じだな」



「ご主人様のためのご主人様だけのおまんこです♡
どんなプレイも、どんな使い方でもお答えします。

あ、ストローク激しくなってるっ♡激しっ♡」



「だったら存分にコキ捨てさせてもらおうとするか！」

「じゅこじゅこ、おまんこの壁挟ってるっ♡
ちんぽ熱くなって♡感じる……子種汁出るのわかるっ……♡」
「そろそろフィニッシュだ！
おら、特濃ザーメン存分に味わいな！」



「あひいっ♡出てる♡ぷりぷりザーメン子宮に沢山っ♡♡イクッおまんこの奥、おちんぽ熱くてイクッ♡♡」

「……中田さん、いんお〜♡♡♡」

「やっぱお前は極上のコキ穴だ。滅茶苦茶出たぜ。
いくらハメても飽きないな。」





























